**受難節第1主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年２月18日**

**「クリスチャンと呼ばれて」**

**イザヤ書56章7節**

**56:7 わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き／わたしの祈りの家の喜びの祝いに／連なることを許す。彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら／わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。**

**使徒言行録11章19～30節**

**11:19 ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。**

 **11:20 しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。**

 **11:21 主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。**

 **11:22 このうわさがエルサレムにある教会にも聞こえてきたので、教会はバルナバをアンティオキアへ行くように派遣した。**

 **11:23 バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。**

 **11:24 バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人が主へと導かれた。**

 **11:25 それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、**

 **11:26 見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。二人は、丸一年の間そこの教会に一緒にいて多くの人を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。**

 **11:27 そのころ、預言する人々がエルサレムからアンティオキアに下って来た。**

 **11:28 その中の一人のアガボという者が立って、大飢饉が世界中に起こると“霊”によって予告したが、果たしてそれはクラウディウス帝の時に起こった。**

 **11:29 そこで、弟子たちはそれぞれの力に応じて、ユダヤに住む兄弟たちに援助の品を送ることに決めた。**

 **11:30 そして、それを実行し、バルナバとサウロに託して長老たちに届けた。**

　　**先日の5日から6日にかけて大雪が降りました。諏訪では25センチほどの積雪でした。私の生まれ故郷でも雪は積もりますが、積もっても10センチほどですのでこれほどの積雪を生活の場で経験するのは生まれて初めてでした。月曜日は雪が降り続く中を、火曜日は雪がやみそうになってから生まれて初めての本格的な雪かきを経験しました。私と妻とで慣れない雪かきをしていますと、同じように雪かきをしているご近所の方たちが声を掛けて下さいました。ご近所さんは私たちが温暖な静岡から引っ越してきたことをご存じですので、慣れない手つきで雪かきする私たちを見て雪かきの方法をアドバイスして下さったり、手伝って下さったりしました。普段ご近所さんとお話をするといってもそんなに長々とお話しするわけではありませんので、今回の大雪で一緒にお話ししたり雪かきしたりというのはいい経験になったなと思いました。**

**雪かきをする中で、あるご近所さんは「お寺と教会はきれいにしておかないとだめよ」と言われ、周りの人は教会をそういう目で見られているんだと思いました。色々お話をする中で多くのご近所さんが教会のことを「教会さん」と親しみを込めて呼んで下さっていることに改めて気づきました。「教会さんはね」とか「教会さんはどうなの？」という感じで呼んで下さるのです。それはこの教会と牧師館が長くこの地に立っていて、地域に受け入れられ地域に溶け込んでいるあかしなのかなと思いました。**

**本日、私たちに与えられた御言葉の舞台はアンティオキアです。エルサレムから約500キロメール北にある都市で、ローマ帝国第3の都市で当時人口が100万人近くいたと言われています。諸外国との交流が盛んなために色々な国の人が住んでいる種々雑多で賑やかな都市でありました。そこにステファノの殉教後に起きた大迫害によって散らされたエルサレムの教会の信徒たちは逃げていき、最初はそこに住んでいるユダヤ人にだけ福音を語っていました。**

**しかし、逃げた信徒たちの中にキプロス島やキレネ生まれといった諸外国生まれユダヤ人たちがいて、彼らはユダヤ人以外つまり異邦人と接することを汚れと考えないために異邦人にも福音を伝えたのでした。その異邦人というのが20節によると「ギリシア語を話す人々」です。ギリシャ語を話す諸外国の人々、ユダヤ人からすると異邦人にもイエス様の福音を語り伝えました。するとイエス様の福音を信じてイエス様に立ち帰る人がたくさん与えられたのです。異邦人の都市であるアンティオキアに、ユダヤ人も異邦人も共にイエス様こそが救い主と信じて告白し、主を礼拝し讃美をする教会の群れが誕生したのです。もちろん立派な会堂などありません。おそらく一般家庭の家でユダヤ人も異邦人もない、隔ての壁のない、そのような教会で礼拝を守ったのでしょう。**

**その噂は遠く離れたエルサレム教会に届きました。今までのエルサレム教会だったら、500キロも遠く離れた都市の異邦人もいる教会の群れのことを聞いたとしても間違いなくほおっておいたでしょう。しかし、コルネリウスの出来事によってエルサレム教会は変わりました。「神はユダヤ人も異邦人も分け隔てなく愛してくださり救って下さる」それが教会の常識になりました。そのためにエルサレム教会は12使徒ではありませんが信仰深く人々の信頼が厚く、慰めの子と呼ばれているバルナバをアンティオキアの教会に遣わしました。**

**バルナバはアンティオキアの教会に行き、多くの異邦人が救われた様子を見て喜びました。バルナバは「主から離れることのないように」と皆に勧め、さらに多くの人が主に立ち帰ったのです。バルナバはこれはとても一人では無理と思い助け手を求めました。それがサウロでした。かつてエルサレムでイエス様を信じる人たちを大迫害し、ダマスコに向かう途中でイエス様と出会い、イエスを主と告白する者へと変えられたあのサウロです。エルサレム教会で回心したサウロを使徒たちが受け入れることができなかったときバルナバが仲介役となって使徒たちとの間を取り持ったあのサウロです。エルサレム教会でユダヤ人から命を狙われて故郷のタルソスに逃げ帰らなければならなかったあのサウロです。バルナバはアンティオキアからさらに数百キロ先のタルソスに行き、サウロを探しました。**

**26節を読むといとも簡単にサウロを見つけ出したように見えますが、当時のタルソスの街の規模はわかりませんが今のように通信手段が乏しい時代に一人の人を探し出すのは容易でないことは明らかです。それでもバルナバは必死にサウロを探し、ついに見つけました。サウロはバルナバの申し出を快諾し二人はアンティオキアに戻りその教会で丸一年間伝道の働きをしたのです。その結果、多くの人がイエスを主であるとの告白に導かれてアンティオキアの教会は周りの人たちから一目置かれる存在となったのでした。**

**26節後半にはこのように記されています。「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。」キリスト者と呼ばれるようになった。ギリシャ語では「クリスティアノス」です。「クリスティアノス」とは「キリストに属する者」とか「キリストに従う者」という意味を持つあだ名です。今まではアンティオキアにおいてもユダヤ教の一派の一つに過ぎないと思われていて、「ユダヤ教ナザレ派」とか「イエス派」とかそんな呼ばれ方をしていたと考えられます。そんな彼らがユダヤ教の枠を超える存在となり、古い律法に縛られることなくイエス・キリストの十字架の救いを信じる者たち、キリストを信じ、キリストに属する者としてアンティオキアに住むユダヤ人や異邦人から一目置かれて「クリスティアノス」と呼ばれるようになったのです。「クリスティアノス」英語では「クリスチャン」です。日本語では「キリスト者」です。意外かもしれませんがエルサレム教会ではなくアンティオキアのユダヤ人も異邦人も共にイエス様を信じる教会の人々のことを周りの人たちは「クリスチャン」「キリスト者」と最初に呼んだのです。**

**「クリスチャン」「キリスト者」という呼び名は、ご近所さんが教会のことを「教会さん」と読んで下さるように、親しみを込めて呼ばれたのかもしれません。また、尊敬の意味を込めて呼ばれたのかもしれません。反対にバカにするような感じで呼ばれたのかもしれません。その詳しいところはわかりませんが、このようにして「クリスチャン」と呼ばれる人たちの群れである教会が、「キリスト者」の群れである教会が周りの人たちから認められたのです。そしてアンティオキアでクリスチャンがどんどん増えていったのです。**

**そのクリスチャンの群れである教会がどのような教会だったのか、もちろん今の私たちと同じように主を見上げて礼拝し讃美しお祈りをしていました。そしてイエス様の十字架と復活の伝道に励みました。今の私たちと同じです。**

**そして今日深いのが27節以下に記されてあることです。これはエルサレムからアンティオキアにやってきたアガボという預言する者が近いうちに世界中に大飢饉が起きると予告したのです。それを聞いたアンティオキアのクリスチャンたちはユダヤに住む兄弟、すなわちエルサレム教会にそれぞれの力に応じて援助の品を送ることに決めたのです。援助の品とは具体的には献金であると考えられています。アンティオキアのクリスチャンたちは同じエルサレムのクリスチャンたちのために大飢饉になっても食糧を調達できるように献金を集めてそれをバルナバとサウロに託したのです。アンティオキアの教会はまだ生まれて間もない教会であり、その教会の信徒たちであるクリスチャンの人たちも信仰を持ってそんなに時間が経っているわけでもありません。教会の規模もエルサレムの教会の方が大きいでしょう。そんなアンティオキアの教会のクリスチャンたちは、いわば親教会のエルサレムの教会から頼まれたわけでもないのに、これから困らないようにと援助の手を差し伸べるのです。いわば自発的な愛の業に励むのです。エルサレムの教会を祈って支えるだけでなく、愛の実践でしかも自発的な愛の実践でエルサレムの教会を支えようとしたのです。小さな教会が大きな教会を支えるのは容易なことではないのは火を見るより明らかです。その献金の金額もわずかなものでしかないかもしれません。けれどもアンティオキア教会のクリスチャンたちは自分たちの教会にバルナバという立派な指導者を送ってくれたエルサレム教会に感謝の思いを込めて献金をするのです。エルサレム教会への感謝、私たちを救って下さった神様への感謝、十字架に掛かって下さり大きな愛を示して下さったイエス様への感謝の思いを持ってエルサレム教会に感謝の献金をささげ、自発的な愛の業を行うのです。それがクリスチャンと呼ばれる人たちの姿であると今日の御言葉は語るのです。**

**「クリスチャン」はキリストに属する者であり、キリストに従う者です。このように呼ばれるということはその姿を見た時にキリストを思い浮かべることができるということです。イエス・キリストがどんな方かわからないけれど、この人たちの人となりを見るとどんな方か何となくわかるということです。それは、いわば小さなキリストです。小さなキリストとしてそれぞれの生活の場においてイエス様が私たちを愛して下さっている愛に応えて感謝を持って小さな愛の業に励むのです。エルサレム教会を支えようとしたアンティオキア教会のように、私たちがそれぞれが自分たちの力に応じて、自分のできる精一杯の愛の業を感謝を持って励んでいくのです。そのような私たちの姿を見た周りの人たちが「キリスト教って何かいいね」とか「ちょっと教会に行ってみよう」と思ってもらえるなら、それは素晴らしいことであると思います。共に小さなキリストとして感謝を持って歩んでいきましょう。**